

變斷面のラーマンに就て (六)

石川 時 信

(三) 數 值 計 算 例

前來數章節に涉りて結構の一部材 AB が其兩端の間に於て慣性能率及荷重を一樣とせざる場合のラーマンの公式を示したが式中に含まれる $\alpha_1, \beta_1, L_1, \alpha_2, \beta_2$ 及 L_2 等は本文當初の (7) 式に示すが如くに、慣性能率及荷重の變化の狀態に依りて、相當面倒なる計算を要す。本章に於ては其の或る特定の場合の數值計算例を示さんとするのである。云ふまでもなく (7) 式に於ける $\alpha_1, \beta_1, L_1, \alpha_2, \beta_2$ 及 L_2 等は慣性能率及荷重の變化の狀態が餘りに複雑にして其の積分が簡単に計算し難き時は、積分式に依らずして總和の形を以て其の値を算出するを得策とす。此に述べんとするは、割合に簡單に其の積分の求め得らるるものに就てのみ積分計算の例を示さんとするのである。而して其の豫備計算として次の公式を掲ぐ。

$$\int_0^1 e^{-mx} dx = \frac{1}{m} (1 - e^{-m^2})$$

$$\int_0^1 \int_0^x e^{-mx} dx^2 = \frac{1}{m} \left(Q + \int_0^1 e^{-mx} dx \right)$$

(139)

$$\int_0^l \int_0^x \int_0^x e^{-mx} dx^3 = \frac{1}{m} \left(\frac{1}{2} l^2 - \int_0^l \int_0^x e^{-mx} dx^2 \right)$$

$$\int_0^l e^{-mx} x dx = l \int_0^l e^{-mx} dx - \int_0^l \int_0^x e^{-mx} dx^2 \quad \dots \dots \dots (140)$$

$$\int_0^l \int_0^x e^{-mx} x dx^2 = l \int_0^l \int_0^x e^{-mx} dx^2 - 2 \int_0^l \int_0^x \int_0^x e^{-mx} dx^3$$

$$\int_0^l \frac{x^m}{(1+ex)^2} dx = \int_0^l \frac{x^m}{e^{mx}} dx \frac{\int_0^l e^{mx} dx}{\int_0^l (1+ex)^2 dx} = K_1 \int_0^l \frac{x^m}{e^{mx}} dx \quad \dots \dots \dots (141)$$

$$\int_0^l \int_0^x \frac{x^m}{(1+ex)^2} dx^2 = \int_0^l \int_0^x \frac{x^m}{e^{mx}} dx^2 \frac{\int_0^l \int_0^x e^{mx} dx^2}{\int_0^l \int_0^x (1+ex)^2 dx^2} = K_2 \int_0^l \int_0^x \frac{x^m}{e^{mx}} dx^2$$

但し $\left\{ \begin{array}{l} n = 0, 1, 2, \dots \dots \dots \\ e \text{ は自然對數の底} \end{array} \right.$

以上 (139) 乃至 (141) 式を使用して次に掲ぐる第三十一圖の如き構脚が變斷面部材なる「門構」に於ける不靜定未知量 H_0 及び其の他の諸量を算出して見ん。

第三十圖の如き場合は (39) 式に依り

$$H_0 = \frac{I_{An}}{I_{CA}} \left(\beta_{CA1} - \frac{\beta_{CA2}}{h} \right) + \frac{V_C \beta_{A11} + J_{A11}}{h} + h \alpha_{A11} + \left(\alpha_{RD2} - \frac{\beta_{RD2}}{h} \right) \dots \dots \dots (39)$$

であつたが今、

$$h = 20\text{呎}, k_2 = 1/4, W = 30,000 \text{ 封度}$$

とすれば

$$V_c = Wk_2 = 7,500 \text{ 封度}$$

又、CA部材は 4" × 4" × 5/8" 山形鋼として其背面距離が $10\frac{1}{2}$ "

より $18\frac{1}{2}$ " に等變するものとすれば、 $I_{CA} = 352\text{吋}^4$, $I_{AB} = 1213\text{吋}^4$

であるから、 $\frac{I_{AB}}{I_{CA}} = 3.732375 = e^{1.31705} = e^{m^2}$ 、(但し e は自然對

數の底) とす。従つて $m = 0.0658525$ CA部材及 BD部材は山形

鋼の等變斷面ならば其の慣性性能率は大體二次曲線 $(1 + C_2)^2$ で表は

せるから二次曲線を以て計算すれば $C = 0.0466$ となる。而して二

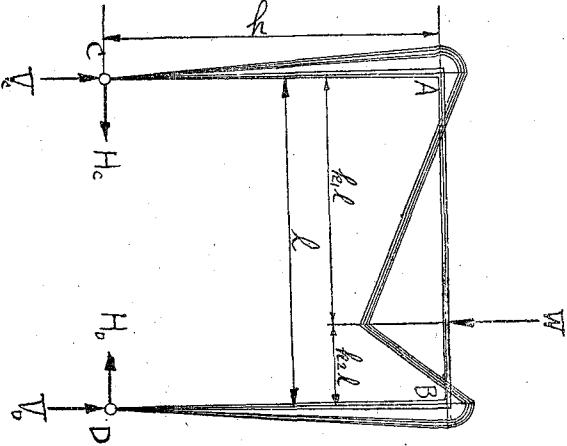
次曲線は其の積分が面倒であるが、前記公式を使用する事とすれば、

$$\left. \begin{aligned} K_1 &= 0.936 \\ K_2 &= 0.927 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (142)$$

$$\text{又、} L_{AMI} = -\frac{1}{2} Wk_2^2 l^2 = -\frac{1}{2} \times 30,000 \times \left(\frac{1}{4}\right)^2 \times 20^2 = -375,000,$$

$$\alpha_{AMI} = l = 20, \beta_{AMI} = \frac{1}{2} l^2 = \frac{1}{2} \times 20^2 = 200$$

$$\text{又公式 (141) 式より、} \beta_{CAM} = 87.443 \times 0.936, \beta_{CAD} = 720.56 \times 0.927,$$



第三十一圖
・ 樑脚變斷面なる門樑

又公式 (141) は m を負號とし、 $(1 + \alpha\omega)^2$ の代りに $(1 - \alpha\omega)^2$ とすれば 遞減斷面部材に對する慣性能率に關する K_1 、 K_2 を表はす事となり、此の場合 K_1 、 K_2 なる記號を用ふれば $K_1 = 0.954$ 、 $K_2 = 0.969$ となる。

従つて $\beta_{RD2} = 326.368 \times 0.969$ $\beta_{RD2} = 2,698.46 \times 0.969$ 。

以上の諸數量を列記して見易からしむれば、

$h = 20$		呎	
$V_o = 7,500$		封度	
$L_{AB} = - 375,000$		封度呎 ²	
$\alpha_{AB1} = 20$		呎	
$\beta_{AB1} = 200$		呎 ²	
$\beta_{CA1} = 87.443 \times 0.936$		呎 ²	
$\beta_{CA2} = 720.56 \times 0.927$		呎 ²	
$\alpha_{RD2} = 326.368 \times 0.969$		呎 ³	
$\beta_{RD2} = 2,689.46 \times 0.969$		呎 ³	

} (143)

此等の値を (39) 式に代入すれば、

$$H_o = - 1475 \text{ 封度。}$$

従つて

$$M_{AO} = H_o h$$

$$= -1475 \times 20 = -29,500 \text{ 呎封度 (第三十一圖参照)}。$$

以上は變斷面部材より成立つラーメンの公式の數値計算をなしたる一例であるが、此に示した $e^{m\omega}$ 又は $(1 + m\omega)^2$ 等
は勿論變斷面部材としては、極めて特別にして、一般には、斷面は急變することもあり、又荷重も急變する事がある故に
其の場合は (143) の値は積分式に依らず總和の形とした方が手数が省けるのである。

第三十一圖に於て彎曲力率圖を示せる線が四本あるは、門脚の各部材が定斷面部材なりとして出来たる従来の公式に於
て CA 部材及 BD 部材の慣性能率を其の部材の各部分の平均のもの又は各部材の大なる方の側より三分の二の長さの點
に於けるもの或は變斷面としての公式壇に其の近似に依るものとの四通りに取り、 M_{10} の比較を示したのにして、2%
乃至13%の差異あるを示す、此の比較の詳細は土木建築雜誌「ツベル」昭和八年二月號拙文にあり。

結 論

以上變斷面部材より成立つラーメンの公式を其の基本形、基本形の適用、及數値計算例の三つに大別して述べたが、其
の當初に掲げたる所の基本式 (13) は

$$M_A - M_B = - (V_A L + L)$$

$$\theta_A - \theta_B = - \frac{1}{EI_A} \left[M_A \alpha_1 + V_A \beta_1 + L_1 \right]$$

$$\theta_A - \theta_B = - \frac{1}{EI_A} \left[M_A \alpha_2 + V_A \beta_2 + L_2 \right]$$

として部材 AB の左端反力 V_A を式中に折込めたるも、其の後色々のラーメンに適用して見たる經驗より見て、本式

は、 V_A を消去して、

$$\left. \begin{aligned} \theta_A - \theta_B &= -\frac{1}{EI_A} \left[M_A \left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right) + M_B \frac{\beta_1}{l} + \left(L_1 - L \frac{\beta_1}{l} \right) \right] \\ \theta_A - d_B &= -\frac{1}{EI_A} \left[M_A \left(\alpha_2 - \frac{\beta_2}{l} \right) + M_B \frac{\beta_2}{l} + \left(L_2 - L \frac{\beta_2}{l} \right) \right] \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (144)$$

の形とした方が多少適用し易い事が判つた。

然しながら撓度撓角法と同じ形とすれば (144) 式は

$$\left. \begin{aligned} M_A &= \frac{EI_A \left[\left(\frac{l}{\beta_2} - \frac{1}{\beta_1} \right) \theta_A + \frac{1}{\beta_1} \theta_B - \frac{1}{\beta_2} d_B \right] - \left[\frac{(L_1 - L \frac{\beta_1}{l})}{\beta_1} \left(L_2 - L \frac{\beta_2}{l} \right) \right]}{\left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right) \frac{1}{\beta_1} - \frac{1}{\beta_2}} \\ M_B &= \frac{EI_A \left\{ \frac{l}{\left(\alpha_2 - \frac{\beta_2}{l} \right)} - \frac{1}{\left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right)} \right\} \theta_A + \frac{1}{\left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right)} \theta_B - \frac{1}{\left(\alpha_2 - \frac{\beta_2}{l} \right)} d_B \right] - \left[\frac{(L_1 - L \frac{\beta_1}{l})}{\left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right)} \frac{(L_2 - L \frac{\beta_2}{l})}{\left(\alpha_2 - \frac{\beta_2}{l} \right)} \right]}{B_1 \frac{1}{\left(\alpha_1 - \frac{\beta_1}{l} \right)} - \frac{\beta_3}{l \left(\alpha_2 - \frac{\beta_2}{l} \right)}} \end{aligned} \right\} (145)$$

の形となりて $\theta_A \theta_B d_B$ を消去する際に莫大の手續を要し、到底公式としての存在の價値なき事を知つた。

文末ながら六ヶ月の長きに涉りて、無しいものを連載し、貴き紙面を汚したるを衷心御詫び申すと共に、讀者竝に先達諸賢の尊き御忠言に接し、尙進んで本文の如きものが其の體裁を備ふる域に達せんことを祈る次第であります。〔完〕